

山脇先生との出会い

多比羅 眞理子

私が山脇先生と初めてお目にかかったのは52年前の大学一年生の時だった。大学生活を謳歌する日々が半年ほどたち、級友から「山脇先生の『女流作家論』が面白いわよ」と聞いた。私は登録していなかったが、級友の言葉にひかれてその授業を聞いてみたくなった。「女流作家論」という科目名が大人の雰囲気を漂わせていたからかもしれない。早速授業の前、講師室の山脇先生をお訪ねした。そして学期途中なので、単位を頂けなくともよいので、聴講させていただきたいとお願いをした。すると快くお許し下さり、テキストをくださった。簡易印刷で綴じられ、英語で書かれたテキストでアフラ・ベーンから始まる女性作家の歴史と作品からの抜粋が書かれていた。授業はシャーロット・ブロンテの項に入っているとのことだった。シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』を英語で読みたいくて英文学科へ進学した私は、何かの運命に導かれるように山脇先生の授業に参加させていただくことになった。授業ではシャーロットの生涯、作品について講読するものだったが、聴講生にも関わらず一番前の席に座り、先生の授業に魅せられていた。

授業での先生のお声は小さかった。しかし、先生のたたずまい、常に背をぴんとされて講義をされる姿勢、また、なんといってもおしやれでいらった。イヤリングにネックレス、そして指輪をされ、スーツをお召しになって上品この上ないご様子に大人の美しさを感じ、理想の女性像として私の心の中に秘かに存在するようになっていった。

その頃、イギリスのロイヤル・シェイクスピア・カンパニーが来日し、若きジュディ・デンチを中心に『十二夜』をはじめとしてシェイクスピアの有名な演目を上演した。大学からも積極的に観劇するように勧められ、私たち学生は今のようには字幕もなく、英語を聞き取れないままにイギリスの雰囲気劇場で味わっていた。休憩時間となり観客に河内桃子さんをはじめとする民芸の俳優さん、外国人の観客が前の方にいることに私たちが気付いた時、スーと山脇先生が素敵な紳

士（ご主人）と共に会場脇の階段を下りていらっしやって、河内桃子さんや外国の方たちと親しげに歓談を始められる姿を拝見して、文化人としての山脇先生の実存在を実感したことがあり、また、誇らしく思ったことがあった。

四年生になり、必修の科目ではエミリ・ブロンテの『嵐が丘』を先生と一緒に講読させていただいた。その夏も過ぎ、進路を決める時期が来たとき先生から「もう進路は決まりましたか、もし、よければもう少し勉強したらどうかしら」とお声をかけていただいた。当時は大学を卒業したら就職するのが一般的で、卒業すると同時に結婚することもあった時代、大学院に進学する人は少なかった。私自身、大学院に進学する意味を考えずに、山脇先生からお声がかかったという嬉しさに英文学の道に進むことに決めてしまった。ここからが真の意味で山脇先生との長いお付き合いの始まりだった。

先生の「勉強する」という言葉はそれから 50 年近いお付き合いの間、二人でお目にかかると必ず会話に出てくるキーワードとなっていたことが今思い出される。大学院時代、そして、ギヤスケル協会で山脇先生が会長で私が事務局長をさせていただいた時、先生は常に、私の前を歩いていらっしやった。有形無形の形で様々なことをお教えいただいた。出版の打ち合わせに大阪や、芦屋へ泊りがけでご一緒したり、お食事をしたりと私の時間は常に山脇先生と共にあった。先生はまず私に家庭人として生きる大切さを常に語られた。そのあとで必ず「今、何を勉強していますか」と尋ねられた。私は授業のこと、ギヤスケルのことをお話しすると、まず黙って私の発言に耳を傾けられ、そののち先生の見解を述べられた。そして最後に「いつ読んでも、ギヤスケルは素晴らしい作家だと実感しますね」という言葉で終わられるだった。私にとって、こうした時間は何にも代えがたい貴重な時間だった。その時間を再び持つことができない寂しさを実感する日々である。

（日本ギヤスケル協会第 3 代会長）